

〔正面〕

岩槻城墟碑

武蔵国岩槻城は太田持資が築き、その弟の資忠が治めました。国内でも難攻不落の城と言われて
います。天正十八年に豊臣氏により攻略され、以後、徳川氏の高力・青山・阿部・板倉・戸田・松平・
小笠原・永井などの大名たちが治めました。宝暦六年、幕府将軍の徳川淳信公(家重)がこの城を
大岡忠光君に賜ってから八代、忠貫君の代に明治維新となり、大名たちは封土をお返し、城郭を
破却することとなりました。岩槻城も廃城となったのです。

破却される前の岩槻城の有り様は次のようなものでした。本丸には門が二か所、櫓が三か所、橋が
二か所ありました。二の丸は幕府将軍が日光廟に参詣する時に宿泊しました。門が三か所あり、そ
の外側に竹沢曲輪・天神曲輪・茶屋曲輪がありました。門が二か所、櫓が一か所ありました。三の
丸は藩主の住まいでした。門が三か所、櫓が二か所ありました。城外には、藩士の屋敷や社寺坊
舎がありました。郭外はもう一つ曲輪があり、新曲輪といいました。城下町はおよそ九町ありました。
持資が築城した時に手ずから植えた杉があり、その枝葉は皆垂れるほど生い茂っていました。人
は二本杉と呼んで、大切にしていました。

今となっては、城壁はもちろん、空堀・櫓・御殿に橋、それに二本杉までも、皆跡形もなくなってしま
い、桑畑や野菜畑の中に当時の鐘楼がただ一つ残るのみです。

毎年忠貫君が東京から来て、先祖忠光君の供養を龍門寺で行います。明治二十九年(1896)、
大岡家の宗家にあたる九条家の九条道孝公も来臨なさいました。これより先、道孝公は大岡氏を
庇護することがあり、忠貫君は、和歌を詠んで感謝の気持ちを表しました。

ふちなみのたかきにほむのなかりせば すえのゆかりのいろやあせなむ

大岡家の旧臣たちもこれを深く徳とし、心ばかりの贈り物をして感謝の気持ちを表しました。道孝公
が来臨されたのは、これに報いるためでした。旧臣たちは、来臨された道孝公に、公孫樹を鐘楼の
傍らに手ずから植えるようお願いし、後世に伝えようと思いました。思うに、公孫樹の葉を大岡氏の象徴
としようとしたのです。

最近になって、旧藩士たちが石碑を城址に建立し、城の来歴と九条公の徳をそこに刻み、後世に知
らせようとして、碑文を記すよう、私に書面で依頼してきました。そこで私は、書面に基づいて撰文し
ました。

明治三十一季十月 高等師範学教授従五位勲五等文学博士南摩綱紀が碑文を記述しました

昭和十一年一月 東京府立第四中学校長正五位勲五等深井鑑一郎が碑文の文字を書きました

〔背面〕

この岩槻城墟碑は、羽峰南摩博士の撰文です。

明治三十二年、岩槻城があった頃に大岡家の家臣だった諸君が石に刻んで後世に伝えようとする計画がありましたが、事情があつて実現できませんでした。それから四十年、九条公が植えた公孫樹は、枝・幹ともに大きく育ち、天に届くほどに高くそびえる様は、九条道孝公の徳の大きさを世に示し表しているようです。

この時にあたり、旧臣諸君がまた石碑の建立を計画し、今度は成し遂げることができました。そして文を記すよう、私に依頼しました。私は固辞しましたが断り切れず、この間の経緯を一文にまとめました。

昭和十一年一月 旧臣深井鑑一郎が文章を記述し、文字も謹んで書きました

建碑主唱者

平野銈治

高田大八

田口義富